

法然教学における但念仏と専修念仏との相違

角 野 玄 樹

【抄録】

本稿では、法然教学に見られる、但念仏と専修念仏を取りあげ、両者の相違点について議論する。いずれも、“ひたすら念仏をする”ということで共通するが、「但念仏」と「専……」と文字面が異なる以上、何らかの意味の相違があることが予想される。

両者の相違点は、助業の扱いである。但念仏では、往生の道として念仏のみしか修行せず、助業を許容しないので、硬直的である。しかし、専修念仏では、往生行としては念仏のみであるが、往生行以外の助業を許容する柔軟性が存する。本稿では、実践上の両者の相違点を明らかにした。

キーワード…法然、但念仏、専修念仏、助念仏、助業

はじめに

本稿では、法然教学における但念仏と専修念仏との実践上の意味の相違について論じる。

両者は、“ひたすら念仏をする”ということで共通するであろうが、「但念仏」と「専……」とは文字面が異なっている^①。文字面が異なるということは、何らかの次元で、意味が異なることも予想できよう。そして実際、筆者が検討したところ、両者には、実践的に、相違点が存すると考える。その相違点を明らかにする。

法然教学において、教義を説く主要な文献として、三部経講説・『逆修説法』・『選択集』をあげることが、穏当な指摘であろう。これから三つの文献の中で、但念仏を説くのは、三部経講説であり、特にその中でも、『無量寿経釈』（以下『大経釈』）に注目する。『阿弥陀経釈』にも但念仏の表現は存するのだが、但念仏について詳しく説くのは、この『大経釈』のほうなのである。よって、但念仏の議論に関し

ては、『大経釈』を中心に検討することにする。すなわち、但念仏の意味を、『大経釈』の記述から読解する。

一方、専修念仏の類の表現について、三部経講説においては、引用・取意程度であり、ほとんど地の文では述べない。^② 専修念仏の類の表現が、単なる取意ではなく、地の文において立証を経て出るのは、右記の三つの文献の中では、『逆修説法』『選択集』である。本稿では、専修念仏の意味を、法然の名著『選択集』の記述から読解していくことにする。

そして、右記の検討を経て、助業を検討に加え、但念仏と専修念仏との意味を更に解明し、その相違点を指摘する。⁽³⁾

第一節 『選択集』における専修念仏の意味

まず、『選択集』における専修念仏の意味から説明する。専修念仏がいかに帰結されているのが、専修念仏の意味を知る上で重要である。ここでは、特に、『選択集』第三章の選択本願念仏説における、専修念仏の導出の内容を見る。

(資料 1)

乃至第十八念。仏往生願者、於ニ彼諸仏土中ニ、或有下以ニ布施、為ニ往
生、行、之土上、或有下以ニ持戒、為ニ往生、行、之土上、或有下以ニ忍辱、為ニ
往生、行、之土上、或有下以ニ精進、為ニ往生、行、之土上、或有下以ニ禪定、為ニ
往生、行、之土上、或有下以ニ般若、若一等是也、為ニ往生、行、之土上、或有下以ニ
菩提心、為ニ往生、行、之土上、或有下以ニ六念、為ニ往生、行、之土上、或有下

以ニ持テ經ニ為ニ往生ノト之ニ土上、或有下以ニ持テ呪ニ為ニ往生ノト之ニ土上、或有下以ニ起立塔像飯食沙門及以孝養父母奉事師長等種々之行ニ各為ニ往生ノト之ニ國土等、或有下專稱ニ其國仏名ニ為ニ往生ノト之ニ土上、如此以ニ一行ニ配ニ一仏ノニ者、是且一往ニ之義也。再往論ニ以ニ其義不定。或有下一仏ノ土中以ニ多行ニ為ニ往生ノト之ニ土上、或有下多仏ノ土中以ニ一行ニ通ニ為ニ往生ノト之ニ土上、如是往生ノ行種々不同、不可具述ニ也。即今選ニ捨前布施持戒乃至孝養父母等諸行、選取專稱仏号、故云ニ選択ニ也。

資料1の内容は、以下のようなものである。第十八願の念仏往生の願について、かの諸仏の国土の中には、布施を往生行とする国土がある。また、持戒を往生行とする国土がある。また、忍辱を往生行とする国土がある。また、精進を往生行とする国土がある。また、禪定を往生行とする国土がある。また、般若を往生行とする国土がある。また、菩提心を往生行とする国土がある。また、六念を往生行とする国土がある。また、持経を往生行とする国土がある。また、持呪を往生行とする国土がある。また、起立塔像・飯食沙門・孝養父母・奉事師長などの様々な行を往生行とする国土がある。また、ひたすらその国土の仏の名前を称えるのを往生行とする国土がある。

一つの行を一つの仏国土の往生行に配当するようなことは、ほんの一例の内容である。他の例を議論すると、その内容は様々である。一つの仏国土の中に、多くの行を往生行とする国土がある。また、多くの仏国土の中には、一つの行を往生行とする国土がある。このように、往生行は様々であり、全てをいい尽くせない。

ここでは、前述の布施・持戒や孝養父母などの諸行を選捨て、専称仏号を選択する。以上のことから、選択というのである、と資料1では述べている。

資料1について、本稿で重要な点は、阿弥陀仏（法蔵菩薩）が、様々な往生行の中から選取して本願とするに、それは、専修念仏であり、様々な往生行の中から選捨て本願としないのは、諸行である、という内容である。つまり前者では、往生行の中から選取して本願とすることを前提として、専修念仏を結論とする内容となつてゐる。このような形式で、専修念仏が資料1で導出されているので、専修念仏の意味に、往生行を前提とする内容が備わっていることになる。このことは、専修念仏を理解する上で、重要である。

すなわち、曾根宣雄氏・齊藤隆信氏の見解によれば、法然の主張は、往生行としての念仏であり、そして、持戒などの行を、往生行以外の行と見なせば、持戒などの修行をする余地が残るということである。⁽⁵⁾つまり、『選択集』の資料1の主張では、往生行を前提・枠組みとする。その往生行の前提・枠組み以外のことについては、論理的に特に言及がないので、⁽⁶⁾諸行をする余地が存するのである。その諸行を往生行と見なさなければ、専修念仏をしつつ、諸行も別時間に行う余地が存するのである。

かくして、『選択集』の専修念仏とは、往生行を前提とする専修念仏であるので、授戒や持戒などの修行を行う余地が存するのである。

第二節 『大経釈』における但念仏の意味

次に、『大経釈』における但念仏を説く文を以下に引用する。すなわち、『無量寿経』三輩文解釈の一部である。

（資料2）

問。見今三輩之文、念仏之外説諸行業、何唯謂念仏哉。所以上品中、念仏外挙出家受戒発心修諸功德。中品中、念仏外説菩提心及齊戒等善。下品中、念仏外説發菩提心、何故唯云念仏往生乎。答。此問最可然。仏意難側、凡下輒難解。然今依善導等意、今案此文、略有二意。一但念仏往生、二助念仏往生。一但念仏者、凡論三品之義事者、本付一法論之、如九品煩惱等。今往生之行、亦可然、何必付行多少、論三品。故今付本願念仏、説三品往生之旨也。以何知之、三品文共於念仏置之、一向之言。謂上品説一向専無量寿仏、乃至下品説一向専念無量寿仏。凡唯余所、云一向者不兼余行意也。故今付念仏立三品、分別品帙也。云云

資料2の内容は、以下のとおりである。質問するに、三輩文を見るところ、念仏以外に様々な行業を説いている。どうして、『大経釈』では、ただ念仏のみを主張するのか。その疑問の理由として、上輩には、念仏以外に、出家・受戒・発心・修諸功德がある。中輩には、念仏以外に、菩提心・斎戒などの善がある。下輩には、念仏以外に、發菩提心を説いている。どうして、念仏往生のみを主張するのか。

答えるに、その疑問は当然であろう。仏の意図は推し量りがたく、

凡庸な者では理解しがたい。しかし、善導などの意図に依って、この三輩を考察するに、簡単に分類すると、一つには但念仏往生と、二つには助念仏往生がある。

一つに、但念仏についてであるが、概して、三品の意味を議論するところ、本来、三品というのは、一つの要素について議論することであり、それは例えば、九品の煩惱などのようなものである。三輩文でのここでの往生行も、それと同様であり、どうして、三輩における行の種類の多い少ないについてのみ三輩を議論するのであろうか、いや、そうとは限らないのである。だから、ここでの議論では、本願念仏の行について、三輩往生の趣旨を説く。どのようにして、それを理解するのかというと、三輩文においては、共に念仏について、「一向」の語を配置している。つまり、上輩では、一向専念無量寿仏と説き、以下の下輩でも、一向専念無量寿仏を説く。概して、他の例になぞらえるに、「一向」というのは、余行を兼ねない意味である。だからここでの議論では、念仏について、三輩を立て、念仏をその三品に区別するのである、と資料2では述べる。

つまり資料2では、三輩における行の種類の多少で三輩の区別があるという立場ではなく、各行の浅深などで三輩を区別することであろう。^⑧そして、各行それぞれに三輩の区別があり、念仏に関しては、三輩文に「一向」の語が配置されているので、念仏のみが焦点となり、念仏のみの三品ということになる。すなわち資料2の但念仏の議論では、兼行（念仏と余行を併せての修行）の三輩の区別の解釈を採用しないということである。

この資料2の内容で、念仏のみを導出する際、「一向」の語を用いて、念仏のみを主張している。この内容は、いわば、念仏の修行のみの世界である。余行の修行が含まれない世界である。そして、資料2では、但念仏の説明であるので、この念仏修行のみの世界というのは、但念仏のことになる。

つまり、この資料2の文脈上、但念仏とは、念仏のみ修行することになる。というのも、資料2では、三輩文の念仏のみを取り出して、三品の区別をする話題である。もし仮に、そこに諸行が加わってしまふと、それは、念仏のみの三品ではなくなってしまう。したがって、このような文脈上、但念仏とは、念仏修行のみの世界なのである。すなわち、資料2での但念仏の語義は、「余行を含まず、念仏のみを修行することとなる。そして、但念仏往生とは、但念仏による往生であり、それを採用することは、他の行を含まず、念仏のみ修行して往生する道ということになろう。

ただし、ここで注意すべき点がある。すなわち、第一節で、専修念仏の意味を説明した際、その専修念仏は、往生行という要素が前提であった。ならば、この但念仏も同様に、往生行が前提になっているのでは、という問いが生じうるであろう。以下では、この問題を考察する。

結論からいえば、但念仏にも前提・枠組みはある。ただし、それは、「往生行」ではなく、「往生の道」という前提・枠組みであると考ええる。なぜなら、『大経釈』では、但念仏について、「但念仏往生」とも表現し、この「往生」の部分が前提であり、それはすなわち、「往生

の道”なのである。『大経釈』には以下の文がある。

(資料3)

依^{ニズルニ}之^ヲ、今三輩文、有^ニ但念仏義、有^ニ助念仏義、亦有^ニ諸行往生義。仏以^ニ一音^ヲ演^ニ説法^ヲ、衆生随^ニ類^ニ各得^ニ解^ヲ。云^ニ仏意多含^ニ也。今且作^ニ三解^ヲ。

資料3では、三輩文に、但念仏義・助念仏義・諸行往生義が存することを指摘する。ここでの「但念仏義」「助念仏義」とは、「諸行往生義」のバランスからすれば、本来は、「但念仏往生義」「助念仏往生義」とあるものと予測可能である。つまり、資料3では、表現を省略して、「但念仏義」「助念仏義」としているのであり、本来は、「但念仏往生義」「助念仏往生義」と示すべきものであろう。

したがって、これら三義とも、「……往生」という内容となるが、この「……往生」というのは、「往生の道」ということであらう。

つまり、但念仏往生ならば、「但念仏して往生する道」ということであらうし、助念仏往生ならば、「助業と念仏をして往生する道」であらうし、諸行往生ならば、「諸行をして往生する道」となるであらう。

そして、この「……往生」という要素を前提として、但念仏・助念仏・諸行が三輩文から導かれ、それぞれ、但念仏往生・助念仏往生・諸行往生となるのである。したがって、『大経釈』の三輩の三義は、「……往生」（往生する道）が前提・枠組みであることがいえるのである。そして『大経釈』では、「往生行」が前提になっている状況ではないようである。

『選択集』の専修念仏では、「往生行」が前提であった。そして、『大経釈』の但念仏は、「往生の道」が前提である。ならば、この両者（各前提）に違いがあるのだろうか。その問いの解答は、次節で議論する。すなわち、この違いは、助業を議論に加えることにより、浮き彫りとなるのである。

第三節 但念仏・専修念仏と助業

第三節第一項 専修念仏と助業

本稿は、但念仏と専修念仏との相違を検討するものであった。両者の意味を説明する中で、前提に微妙な違いらしきものがあるのであった。すなわち、但念仏の前提は、「往生の道」であるが、専修念仏の前提は「往生行」である。この「往生の道」と「往生行」という両前提の表現の違いは、単に表現の違いというだけではなく、意味も異なるのである。そして、その違いを明らかにするには、助業が鍵となる。すなわち、「但念仏―助業」と、「専修念仏―助業」との各関係を明らかにする。

まず本項では、「専修念仏―助業」の関係である。助業には、同類と異類が存する。まず、『選択集』第二章の同類の助業からである。

(資料4)

次助業者、除^テ第四口称^ヲ之外、以^ニ説誦等^ノ四種^ヲ而為^ニ助業^ト。即文云、若依^ニ礼誦等^ノ、即名為^ニ助業^ト是也。

資料4では、正行のうち、正定之業以外の正行を助業とする。そして、

『選択集』第二章では、その正行を積極的に認めた上で、五番相對などを説いている。この正行を積極的に認めていることから、少なくとも、後論するが、『大経釈』のように、助業を廃させる（助業に帰依することをやめることをさせる）のではないことは明らかであろう。

次に、『選択集』第十六章の文を引用する。

（資料5）

計也。夫速^{ハカリミハソレ} 欲^ニ離^ニ生死^ニ、二種勝法^ニ中且^ニ 閼^ニ 聖道門^ニ 選^ニ入^ニ。淨土門^ニ 欲^ニ入^ニ淨土門^ニ、正雜二行^ニ中且^ニ 拋^ニ 諸雜行^ニ 選^ニ 歸^ニ正行^ニ。欲^ニ修^ニ於正行^ニ、正助二業^ニ中猶^ニ 傍^ニ 於助業^ニ 選^ニ 應^ニ 正定之業^ニ者、即是稱^ニ仏名^ニ。稱^ニ名^ニ必得^ニ生^ニ。依^ニ仏本願^ニ 故^ニ。

この資料5でも、助業が出るが、助業を傍らとするとある。「傍」と、助業に対して消極的ともいえるが、完全な否定とはいえない。それは、資料5の内容で、聖道門や雜行では、「閼」「拋」と否定を断言しているといえるが、助業に対しては、否定まではしていない。「傍」とあり、副次的に認めるというニュアンスであろう。したがって、助業を修行する余地があることになる。

次に、『選択集』第四章の異類の助業である。

（資料6）

二為^ニ助^ニ成^ニ 念^ニ仏^ニ 説^ニ此^ニ諸行^ニ者、此^ニ亦有^ニ二意^ニ。一以^ニ同^ニ類^ニ善根^ニ 助^ニ成^ニ念^ニ仏^ニ。二以^ニ異^ニ類^ニ善根^ニ 助^ニ成^ニ念^ニ仏^ニ。初同^ニ類^ニ助成^ニ者、善導和尚觀經疏中、挙^ニ五種^ニ助行^ニ 助^ニ成^ニ念^ニ仏^ニ一行^ニ是也。具^ニ如^ニ上^ニ正雜二行^ニ之中説^ニ。次異^ニ類^ニ助成^ニ者、先就^ニ上輩^ニ而論^ニ正助^ニ者、一向專念^ニ無量寿^ニ者、是正行也、亦是所^ニ助^ニ也。捨^ニ家^ニ棄^ニ欲^ニ

而作^ニ沙門^ニ 發^ニ菩提心^ニ 等者、是助行也、亦是能^ニ助^ニ也。謂^ニ往生之業^ニ、念^ニ仏^ニ為^ニ本^ニ 故、為^ニ一向修^ニ 念^ニ仏^ニ、捨^ニ家^ニ棄^ニ欲^ニ 而作^ニ沙門^ニ、又發^ニ菩提心^ニ 等也。就^ニ中^ニ 出家^ニ發心^ニ 等者、且^ニ 指^ニ 初出^ニ及^ニ以^ニ初^ニ發^ニ。念^ニ仏^ニ是長時不退之行、寧^ニ容^ニ妨^ニ 碍^ニ 念^ニ仏^ニ也。中輩^ニ之中^ニ 亦有^ニ起^ニ立^ニ塔^ニ像^ニ懸^ニ繪^ニ燃^ニ燈^ニ散^ニ花^ニ燒^ニ香^ニ等^ニ諸行^ニ、是則念^ニ仏^ニ助^ニ成^ニ也。其旨見^ニ往生要集^ニ。謂^ニ助^ニ念^ニ方法^ニ中方^ニ施^ニ供具^ニ等^ニ是也。下輩^ニ之中^ニ 亦有^ニ發心^ニ、亦有^ニ念^ニ仏^ニ。助^ニ正^ニ之義^ニ准^ニ前^ニ可^ニ知^ニ。

資料6を見ても、異類の助業をある程度認めており、やはり、『大経釈』のように、助業を廃しているようには見えない。資料6の内容から、助業を修行する余地があるだろう。

以上のように、『選択集』では、助業の修行を認めている。

しかしそもそも、専修念仏とは、念仏のみを修行するのであるから、専修念仏をしながらの助業を、どのような理屈で認めるのであろうか。筆者は、以下のように考える。第一節では、専修念仏の意味に、往生行を前提・枠組みとする内容があることを指摘した。そのため、往生行以外の諸行をする余地があることをも示した。その点は、既に、曾根氏・齊藤氏が指摘されているのであった。

この両氏の見解を拡張して、筆者は以下のことを提示したい。すなわち両氏は、専修念仏に帰依したとしても、往生行以外の諸行を修す余地があるとされた。そうすると、助業も往生行と見なさなければ、専修念仏をしながらの助業も十分認められることになる。そして実際、筆者が考えるに、助業は往生行ではないだろう。助業とは、念仏を助けるものであり、助業単独では、往生のための行ではないだろう。念

仏と交えることにより、念仏と助業は往生行であろうが、あくまで、助業は念仏を助けるためのものであるので、助業単独では往生行ではない。

したがって、助業は往生行という前提・枠組みの外にあるもののため、修行することを認められるのである。

こうした、専修念仏の教えは、後論する『大経釈』の但念仏の教えの硬直さに比べ、柔軟的といえるであろう。つまり、ひたすら念仏をするとしても、助業を修行することを許容するため、それは、柔軟的といえるであろう。

第三節第二項 但念仏と助業

次に本項では、〈但念仏―助業〉の関係である。『大経釈』三輩文解釈では、助念仏を説く。その部分を以下に引用する。

(資料7)

二異類善者、是往生要集意也。彼集中立十門、釈念仏往生。且其中第四正修念仏、第五助念方法。云正修念仏者、此有五念門。其中第四觀察門正是念仏門也。云助念方法有七。其七者。云且第七惣結要行問云。上諸門中等云此義即似今經意。此即以異類善根、助成念仏也。彼集意以助念仏、為決定往生業。云隨能助者、可謂諸行往生。今且隨所助、以此亦為念仏門。

資料7の内容は、所々、本文に省略の跡があるが、おおよそ以下のようである。異類の善というのは、『往生要集』の意図である。かの

法然教学における但念仏と専修念仏との相違（角野玄樹）

『往生要集』では、十門を立てて、念仏往生を解釈している。『大経釈』のここでの議論では、その中の『往生要集』第四の正修念仏・第五の助念方法である。正修念仏というのは、これに五念門がある。その中の第四は觀察門であり、まさに念仏である。助念方法に七項目ある。『往生要集』第七の惣結要行の文を見るに、この同書の文の意味は、『無量寿経』三輩文の意図に近似している。同経では、異類の善根により、念仏を達成するため助けるのである。かの『往生要集』の意図は、念仏を助けることにより、決定往生の業とするのである。助ける主体に従えば、諸行往生といふべきである。『大経釈』のここでは、助ける対象に従うので、念仏門となる、と資料7では述べている。このように、資料7では、三輩文の諸行を助業（助念仏）と見なし、議論をしている。

『大経釈』では、助業を説くのであるが、そののちの議論で、助業を廃する旨が説かれている。すなわち、同書の無上功德文解釈である。

(資料8)

二此廢上助念及諸行、明但念仏故者、上本願願成就文雖明但念仏、上來迎願等中及次三輩文明助念往生、諸行往生。依之諸往生者、於但念助念諸行、懷疑網未決。故至流通、初廢助念諸行二門、明但念仏往生。謂其有得聞彼仏名号。云善導釈云。其有得聞彼弥陀仏名号、歡喜至一念、皆當得生彼。云此義亦非私意、即善導御意也。此經三輩中說助念及諸行、後流通中、廢之唯明念仏。其次第似觀經。觀經中、先広逗機縁、說十三定善、三福九品之業、明諸行往生。其次仏

以此法、付属給文云。仏告阿難、汝好持是語等。云。善導
 釈云。從二仏告阿難汝好持是語一已下、正明付属彌陀名号、流
 通於退代上來雖説定散兩門之益、望二仏本願、意在衆
 生一向専称彌陀名。已上此已如此、今經亦如此。上
 返機縁、且雖説助念仏往生及諸行往生之旨、准二仏本願故、
 至于流通初、廃諸行歸但念仏也。助行猶廢之、況但諸行哉。
 云

資料8の内容は、以下のものである。上記の助念仏や諸行往生を廃し
 て、但念仏を明らかにするというのは、第十八願の願成就文に、但念
 仏を明らかにするけれども、上記の第十九願や三輩文で、助念仏・諸
 行往生を明らかにしている。このことから、様々な往生の行者が、但
 念仏・助念仏・諸行について、疑網を抱いてしまつて、どれにしたら
 よいのか、決定しづらい。だから、この流通分の最初で、助念仏・諸
 行往生を廃して、但念仏往生を明らかにする、と述べる。そして、
 『無量寿経』無上功德文や、善導の解釈文を引用し、この見解は、私
 の意図だけではなく、善導の意図であるとする。三輩文の中で、助念
 仏・諸行往生を説き、流通分で、この二つを廃し、ただ念仏を明らか
 にする。その手法は、『観経』に似ているとする。同経では、まず
 様々な機根に教えを与えるに、定善・散善の行を説き、諸行往生を明
 らかにする。次に、釈迦がこの教えにより、付属するのは、『観経』
 付属文・善導付属釈文によれば、阿弥陀仏の名号であり、そのことは、
 『無量寿経』でも同様である。前半のほうでは、機根によつて教えを
 与えるに、助念仏・諸行往生を説くけれども、阿弥陀仏の本願になぞ

らえるので、流通分の最初では、諸行に帰依することをやめることを
 させ、但念仏に帰依させる。助念仏でも廃するのである、ましてや諸
 行ならなおさらである、と資料8では述べる。

三輩文において、但念仏往生・助念仏往生・諸行往生の三義がある。
 それらが並置されているので、『無量寿経』の読み手が、三義のうち、
 どれにしたらいのか、疑網を抱いてしまう。そのため、無上功德文
 では、念仏往生のみを説いているので、但念仏往生を明らかにし、か
 つ、帰依させようとしている、ということである。

このように、三輩文の三義に対して、無上功德文を連結し、但念仏
 往生を導出するという形式をとると、この教理の構造上、助念仏往生
 と諸行往生を廃さざるをえなくなる。無上功德文では、助念仏往生・
 諸行往生を全く示していないので、それらを明らかにすることをやめ、
 それらに帰依することをやめることをさせることになるのである。

そうすると、少なくとも『大経釈』では、助念仏を勧めず、但念仏
 のみを勧めることになる。つまり、衆生側からすれば、但念仏のみを
 するということは、諸行はもちろん、助業はしないということである。
 これは、例えば、積極的に助業を勧める、善導の助業観とは異なるで
 あらう¹⁶。また、前述したように、助業を修すことを認める『選択集』
 の助業観とも異なることになる。

このように、助念仏を勧めず、但念仏のみ修すことが残るとい
 う『大経釈』での状況は、『選択集』などと比べ、ある意味、硬直的と
 いえる。

この『大経釈』の但念仏の教えの硬直さは、何に由来するのであ

うか。それは、但念仏のもつ意味と、「往生の道」という三輩の三義の前提であろう。すなわち、但念仏の意味は、念仏のみの世界なので、そのみに固定すれば、但念仏のみになり、諸行はもちろん、助念仏でさえ除外してしまうのである。

これに対し、次のような疑問が浮かぶ。すなわち、『大経釈』三輩の三義において、専修念仏と同じように、往生行を前提としていれば、助業を修す余地があるように見える。

この疑問に対しては、「往生行」と「往生の道」の違いに着目すればよいのである。すなわち、『大経釈』三輩の三義の前提は、「往生行」ではなく、あくまで「往生の道」なのである。すなわち、三輩文に、「往生の道」や、善導の教え（正雑二行・正助二業の説）という前提を加えれば、但念仏往生・助念仏往生・諸行往生が導出される。つまり、助業も「往生の道」に加わることになる。助業単独では往生行ではないが、助業に「往生の道」という前提をかける。すると助業は、本来、念仏と組みとなるものであり、それならば十分、往生の道になりえるので、助業と念仏をする道、つまり、助念仏往生の道が導出されるのである。

そして、その但念仏往生・助念仏往生・諸行往生の三義の中で、但念仏往生のみを固定すれば、残りの助念仏往生・諸行往生を廃さざるをえなくなるのである。

一方、『選択集』の専修念仏の場合、往生行を前提・枠組みとして、専修念仏のみ主張している。この際、助業は、往生行の枠外であるので、専修念仏のみに固定しても、助業は枠外なので、その固定に関係

がない。よって、専修念仏とともに、助業を修行する余地が存するのである。

『大経釈』の但念仏では、「往生の道」が前提のため、助業を枠外に出すことができず、但念仏往生のみに固定する際、諸行往生はもちろんのこと、助念仏往生もいっしょに廃してしまうことになる。それは専修念仏に比べ、硬直的といえよう。このように、但念仏の教えが硬直的なのは、但念仏のもつ意味と、「往生の道」という三輩の三義の前提によるのである。¹⁷⁾

そして、上述で問題提起していた、「往生行」と「往生の道」の両前提の違いは、以上のような点なのである。

おわりに

本稿の内容を以下にまとめよう。

まず、但念仏と専修念仏の意味を、『大経釈』と『選択集』の文から引き出した。すなわち但念仏は、『大経釈』三輩文解釈で導出されているが、その導出の際、三輩文の各行にそれぞれ三品の別があるという文脈で示されるのであった。三輩文の「一向」の語より、念仏のみの三品の別があり、このことから、但念仏が導出されるのであった。その文脈上、但念仏の語義は、「余行を含まず、念仏のみを修行する」ということである。諸行はもちろんのこと、助業でさえ、但念仏は許容しないのである。

三輩に三義も存するため、どれにすればよいのか、往生の行者が疑

網を抱くという問題に対して、無上功德文解釈で、但念仏往生の道のみを明らかにすることにより、その解答としている。そのように、硬直的に、助念仏往生の道さえ拒否し、但念仏のみに固定化しているのである。

次に、専修念仏については、選択本願念仏説より導出される場合、往生行を前提・枠組みで導出されるのであった。そのため、曾根氏・齊藤氏がいわれるように、専修念仏は、単に念仏のみ修行するというだけでなく、往生行の枠外であるなら、持戒などの諸行が可能なのである。そして、その説を更に拡張すれば、助業をも併せて修行することが可能なのである。したがって、専修念仏のほうが、但念仏よりも、往生行以外の助業を許容する分、柔軟的といえる。

そして、本稿の問題提起に即して結論を示せば、以下のとおりである。但念仏と専修念仏との実践上の意味の大きな相違点は、但念仏は、助念仏を拒否するが、専修念仏は、往生行以外の助業を許容する点にあるといえる。

註

(1) 法然は、専修念仏の類の表現として、「専念弥陀」「専称仏号」「一向専称弥陀仏名」「一向専念仏」等々と記述する。本文の「専……」とは、これらの専修念仏の類の表現を含むものとする。

(2) 三部経講説において、専修念仏の類の表現をする箇所は、以下のとおり。ほとんどが、引用や取意といえる。『昭法全』八〇頁、八六〜九一頁、一二〇頁、一二三〜一二四頁、一二六頁、一四七〜一四九頁。無論、ここで専修念仏の類の表現の検索をする範囲は、同書の古層

の部分と予想される部分である。古層の部分が、どの範囲か、まだ十分に明らかになっていないが、なるべく、採録する方向で上記の箇所を指摘した。明らかな新層部分は、後人の加筆のため、検索から除外した。岸一英『逆修説法』と『三部経釈』（藤堂恭俊博士古稀記念浄土宗典籍研究 研究篇、同朋舎、一九八八年十一月）、同『三部経釈』の研究（二）（『法然上人研究』一、一九九二年四月）、同『阿弥陀経釈』古層の復元―『三部経釈』の研究（五）―（『高橋弘次先生古稀記念論集 浄土学仏教学研究論叢』一、山喜房仏書林、二〇〇四年十一月）、同『阿弥陀経釈』古層復元本（『仏教文化研究』五四、二〇一一年三月）など参照。

しかし、右記の三部経講説における専修念仏の類の箇所のうち、『阿弥陀経釈』（『昭法全』一四七〜一四九頁）では、専修念仏の類の表現を、地の文でしているように見える。これについては、以下に検討しよう。同書の地の文のように見える専修念仏の類の表現を引用しよう。

（資料一）

將^ニ此^ニ經^ヲ、略^シ有^ニ四^ノ意^ヲ。一者^ニ来^ニ意^ヲ、二^ニ專^ニ雜^ヲ、專^ニ亦^ニ有^ニ一^ノ。一^ニ正^ニ定^ヲ、二^ニ助^ニ行^ヲ。（『昭法全』一四七頁。岸一英『阿弥陀経釈』古層復元本）（『仏教文化研究』五四、二〇一〇年三月）二頁上。なお、専修念仏の類の部分をゴチックで示した。）

この資料一は、同書の冒頭部分である。同書の構成を示しているところであり、それに四意があるとする。そして、その第二で、『阿弥陀経』には、専と雑があり、専に、正定と助行の意味を含むとする。このうちの「専」とは、おそらく、専修正行であり、専修念仏の類といえる。「雑」とは雑修雜行であろう。また、「正定」とは正定之業であり、「助行」とは助業のことであろう。いずれも、善導教学を援用して、『阿弥陀経』内に、そのような意味が含まれているという旨を示すものであろう。

次の引用文も、同書の地の文のように見える専修念仏の類の表現である。

(資料二)

二念仏往生、是亦有二。一、念仏往生、二、引証勸往生。付、念仏往生、亦為二。一、修因、二、感果。一付、修因、亦為二。一、發願、二、念仏。一、發願者、發往生願。願者、云、經云、衆生聞者、應下當發願願生彼國。所以者何、得与、与、如、是、諸上善人俱会中。一、云、是、則、發往生之願也。二、念仏(往生)者、付、之、為二。一、簡小善、二、正修念仏。一、簡小善者、(不足、為、往生因)。善導以雜善、名小善。文云、極樂無為涅槃界、隨緣雜善、難生。故使、如來選要法、教念、彌陀專復專。七日七夜心無間、長時起行、倍皆然。臨終聖衆持華現。身心踊躍、坐金蓮。坐時即得無生忍。一念迎將至仏前、法侶將衣競來著。証得不退、入三賢矣。

〔付、此文、為二。一、簡小善、二、正修念仏。一、簡小善根者、不可以小善根福德因緣得生彼國者、諸余雜行者難生彼國。不、欲、生、彼國、故、云、隨緣雜善、難生。少善根者、對、多善根、之言也。然、則、雜善、是、小善根也。念仏、是、多善根也。故、竜舒淨土文云、襄陽石刻、阿彌陀經、乃、隋陳仁陵所書。字画清婉、人多慕玩。自一心不乱而下云、專持名号、以、称名、故、諸罪消滅、即是、多善根福德因緣矣。今世、伝本、脱、此、二十一字、已。非、啻、有、多少、蒙、亦、有、大小、蒙。謂、雜善、是、小善根也。念仏、是、大善根也。亦、有、勝劣、蒙、謂、雜善、是、劣善根也。念仏、是、勝善根也。小善根者、是、則、不足、為、往生因、諸善根也。大小、者、是、相待之法也。無、有、定性。云、而、大小、蒙諸師異説。云、今、依、善導、以、雜善、名、為、小善。云、二、正修念仏者、是一心、稱、念、彼、仏、名、仏、名、為、念仏。云、經云、若有、善男子、善女人、聞説、阿彌陀仏、執持、名号、若、一日、若、二日、若、三日、若、四日、若、五日、若、七日、一心、不、亂。云、是、則、專修、正行、修念仏、三昧、文也。文

法然教学における但念仏と専修念仏との相違(角野玄樹)

中有二四意。一、若有善男子善女人者、是則明念仏行者。付、之、雖、舉、善人、意、亦、兼、惡人。故、善導、釋、此文云、若、仏、在世、若、仏、滅後、一切、造罪、凡夫、但、廻、心、念、阿彌陀、願、生、淨土、即、得、往生、淨土。云、云、執持名号者、此、正修念仏也。云、云、次、若、一日、乃至、七日者、是、則、修念仏三昧、時節、延促也。文、但、雖、舉、一日、七日、意、兼、一生、乃至、十声、三声、一声、等、時節。故、善導、釋、此文云、上、尽、百年、下、至、七日、一日、十声、三声、一声、等、命、欲、終、時、仏、与、聖衆、自來、迎接、速、得、往生。云、云、以、之、案、之、今、此、經意、但、非、明、善人、一日、七日、往生、兼、又、明、十惡、輕罪、破戒、次罪、五逆、罪人、往生、也。云、云、次、一心、不、亂者、念仏、時、心、不、散、乱、至、誠、至、信、專、念、仏、名、也。云、云、是、則、往生修因也。〔昭法全 一四八—一四九頁。岸一英「阿彌陀經釈」古層復元本〕〔仏教文化研究 五四、二〇—二〇一年三月〕三頁上—四頁上。なお、専修念仏の類の部分をゴチックで示した。また、右記岸氏作成古層復元本を参照して、新層の部分を「」内にいれた。また、資料二の一八行目・一九行目・二一行目「蒙」は「義」の誤りであろう。〕

この資料二では、地の文のように見える専修念仏の類の表現は、古層では二箇所(「専修正行修念仏三昧」「専念仏名」)存する。これらの専修念仏は、文脈上、『阿彌陀經』の一日七日念仏文を承けてのものであろう。そして、同文に対する、善導『法事讃』の解釈では、その念仏を、「念彌陀專復專七日七夜心無間長時起行倍皆然」と専修念仏の類で表現する。したがって、この構成上、『阿彌陀經釈』の法然の地の文のように見える専修念仏の類の表現は、善導の釈を承けてのものであろう。つまり、善導の専修念仏の類の表現の取意が、法然の同書の地の文のように見える専修念仏の類の表現なのである。

よって、資料二の二つの専修念仏の類の表現は、取意という形式であって、議論を経ての立証による専修念仏の導出という形式ではない。また、資料一についても、資料二を承けてのものである。資料二の

内容がある故、資料一の専修念仏の類の表現があるはずである。つまり、資料一の専修念仏の類の表現は、『阿弥陀経』一日七日念仏文のことであるので、資料二の解釈を承けているはずなのである。したがって、資料一も、間接的に善導文の取意なのである。

よって、『阿弥陀経』における専修念仏の文は、いずれも引用や取意と結論づけられる。

- (3) なお、本稿のこの問題提起についての先行研究は、管見の及ぶところ、特に発見できなかった。すなわち、両者の意味の相違を、明確に指摘する論攷は発見できなかった。

- (4) 水谷眞成監修・解説『往生院本選択本願念仏集』（法蔵館、一九八〇年十一月）五一―五三頁。大正大学浄土宗宗典研究会編『選択集』諸本の研究〈資料編〉第二巻・往生院本 翻刻（文化書院、一九九三年三月）二六―二七頁。『昭法全』では、三一九頁に該当。なお、『選択集』の引用については、左訓は右ルビの（ ）内にいれた。また、本稿での引用文の句読点は、三部経講説の引用文以外は、角野が付けた。

- (5) 曾根宣雄「法然浄土教における念仏と倫理」（『日本仏教学会年報』七四、二〇〇九年七月）、齊藤隆信「浄土宗学としての戒とその意義」（『日本仏教学会年報』七四、二〇〇九年七月）参照。

曾根氏は前掲論文で、『選択集』第三章の選択本願念仏説を取りあげ、「往生行として阿弥陀仏が選択されたのは、専称仏号の一行であって、（二〇五頁）と、専修念仏は往生行を前提とするという、筆者が本文で提示した説と近似した内容を示唆される。そして、「往生行は念仏であるが、決して他の善根を否定はしないのである。このことは「往生行」念仏」を踏まえた上での諸善根の肯定を示しているものと言えるだろう。」（二一四頁。なお、一部、衍字と思われる部分を角野が修正した。）と指摘され、専修念仏の立場にあっても、廃悪修善の余地があることを示される。

また、齊藤氏も前掲論文で、「法然が廃捨したのは往生行としての戒であって、非往生行としての戒はもとより廃捨する対象ではなかった。」（二三五頁）と指摘され、やはり専修念仏の立場であっても、持戒の余地があることを示される。

- (6) ただし厳密に言えば、往生行の枠外でも、聖道門の道には進まないという条件が存する。すなわち、往生行の前提とともに、「出離生死のため」という前提も存する。つまり、「出離生死のためならば、専修念仏である。」や、「出離生死のためならば、聖道門ではない。」という主張内容も、法然の教えには存している。これにより、聖道門を主張しないことになる。

- (7) 『昭法全』八八頁。なお、資料二の四行目では、「側」とあるが、「測」が正しいであろう。また、資料二の一〇行目の「唯」は、「准」の誤記であろう。

- (8) ただし、「各行」といっても、複数の行を組み合わせる場合もあるだろう。『大経釈』の三輩では、但念仏往生・助念仏往生・諸行往生を説くが、後の二者については、複数の行を組み合わせて行うことが予想される。よって、三品の区別でも、或る行の一行だけではなく、複数の行を組み合わせて行う行も含むであろう。それを一体と見なし、三品の区別を立てるのだろう。

- (9) 『昭法全』九〇頁。

- (10) 水谷眞成監修・解説『往生院本選択本願念仏集』（法蔵館、一九八〇年十一月）二七頁。大正大学浄土宗宗典研究会編『選択集』諸本の研究〈資料編〉第二巻・往生院本 翻刻（文化書院、一九九九年三月）一四頁。『昭法全』では、三二四頁に該当。

- (11) 水谷眞成監修・解説『往生院本選択本願念仏集』（法蔵館 一九八〇年十一月）二〇六頁。大正大学浄土宗宗典研究会編『選択集』諸本の研究〈資料編〉第二巻・往生院本 翻刻（文化書院、一九九九年三月）一〇四頁。『昭法全』では、三四七頁に該当。

(12) 水谷眞成監修・解説『往生院本選本願念仏集』（法蔵館、一九八〇年十一月）七四～七六頁。大正大学浄土宗宗典研究会編『選択集』

諸本の研究〈資料編〉第二巻・往生院本 翻刻（文化書院、一九九九年三月）三八～三九頁。『昭法全』では、三二三頁に該当。

(13) 『昭法全』八九頁。

(14) 『昭法全』九二頁。なお、資料8の三〇四行目「故至流通、初」の訓点は、「故至流通初」が正しいであろう。また、資料8の一四行目の「廃」「帰」の訓は、「廃せしめ」「帰せしむ」と使役でよむべきであろう。『選択集』にも、廃帰を説くが、その『選択集』の廃帰を使役で読むべきことを既に本庄良文氏が指摘されている。右記の訓の修正案は、本庄氏のご指摘を参考にした。本庄良文『選択集』第四・第十二章における「廃立」の語義」（『八百年遠忌記念 法然上人研究論文集』、二〇一一年一月）参照。

(15) 無上功德文の「無上功德」という語は、法然の解釈では、往生の因を意味すると考える。つまり、『大経釈』では、無上功德文と善導の釈文を引用する。『無量寿経』無上功德文では、

（資料三）

仏語ハ彌勒、其有得聞、彼仏名号、歡喜踊躍乃至一念、當知、此人為得大利、則是具足無上功德。（『浄全』第一巻三五頁）

なお、引用文中の傍線は角野が付した。）
とある。また、善導釈文では、

（資料四）

其有得聞、彼彌陀仏名号、歡喜至一念、皆當得生彼（『浄全』第四巻三六二頁上。なお、引用文中の傍線は角野が付した。）

とある。資料三・四とは、傍線部が対応するであろうが、同経では、大利・無上功德を得るところを、善導釈文では、極楽に往生すると解釈している。この内容から、法然が、大利・無上功德を得ると

いうことは、往生の因を得ることと理解したであろう。

(16) 例えば、善導は、『観経疏』散善義の深心釈の中で、正行を説く。

この正行の説では、雑行と比べ、明らかに正行を積極的に主張しているように見える。その正行の中に、助業も含まれる故、当然、助業も積極的に勧めているといえよう。更に善導は、『往生礼讃』前序の至誠心釈で、

（資料五）

一者至誠心、所謂身業礼拝彼仏、口業讚歎稱揚彼仏、意業專念觀察彼仏。凡起三業、必須真実、故名至誠心。（『浄全』第四巻三五四頁下。）

と、身口意の三業を修行するに、真実でなすべきことを説く。この三業の修行には、礼拝・讃嘆・觀察などが含まれている。すなわち、正行の助業であろう。これら三業の助業が積極的に主張されているようなので、やはり、善導は助業を積極的に主張しているといえるだろう。ところで、念仏と助業は、同時に修行するの否か、考えてみるに、例えば、念仏をしながら、助業である礼拝正行は同時になしえるように思われる。

しかし、中には、念仏と同時に出来ない助業もあるだろう。例えば、三輩文の異類の助業で、発菩提心があるが、この発菩提心と念仏が同時に行われるというのは、少し考えづらい。心では、菩提を求める意図をもちつつ、同時に阿彌陀仏を念じ称えるというのは、少し考えづらいであろう。このように助業でも、同時に出来ないものもあるだろう。その場合、その同時に行わない助業と念仏の場合、その念仏は但念仏にもなりえるように見える。つまり、助業を同時に修しているわけではないので、但念仏を修行しえるように見える。だとすれば、別時間ながらも、助業を修行しつつ、但念仏を修することがありえてしまい、但念仏を固定した場合、助念仏を必然的に廃さざるをえないという私見が崩れることになってしまう。

この問題については、以下のように考えるべきである。たとえ、助業を念仏とは異なる時間に修行したとしても、その行者の意図するところでは、その助業とは、あくまで、念仏を助ける行であるという位置づけのほずである。そうすると、その助業に助けられる念仏とは、その助業と組みになっており、やはり、但念仏とはいえないであろう。時間は離れていても、あくまで、当該の助業と念仏とは組になっているので、その当該の念仏は、念仏のみの但念仏ではない。単なる念仏である。したがって、たとえ、念仏とは異なる時間に修行する助業であっても、その当該の念仏は但念仏でない。

また、『大経釈』での但念仏の導出は、三輩文の各行にそれぞれ三品の別があり、三輩文では、「一向」の語から、念仏のみの三品の別がある。したがって、但念仏が存在するということであつた。ここで、同時であろうが、異なる時間であろうが、三輩の諸行の助業を加えると、その助ける対象の念仏と組になるので、念仏だけの三品の区別ではなくなる。助業の三品の区別を考慮しなくてはならない。つまりこの場合、三品のどこに配当されるかは、念仏と助業のありようによって決まってしまう。この状況は、念仏のみの三品ではなく、したがって、但念仏ではない。よつて、この視点からもやはり、但念仏と助業の組み合わせはありえず、助念仏をする場合、その助ける対象となる念仏は、単なる念仏であるのである。

よつて、『大経釈』における但念仏の場合、助念仏を必然的に廃さざるをえないという私見は、崩れておらず、妥当であろう。

〔参考文献〕

- 安達俊英「法然上人における選択思想と助業観の展開」（『浄土宗学研究』一七、一九九一年三月）
- 角野玄樹「無上功德文に対する法然の解釈（二）——『無量寿経釈』の場合——」（『佛敎大学仏敎学会紀要』一七、二〇一二年三月）

- 同「『逆修説法』第三七日の本願解釈——選択本願念仏説・第十八願本体説・本願根本説——」（『佛敎大学仏敎学部論集』九七、二〇一三年三月）
- 同「『逆修説法』第五七日における専修念仏説の立証」（『佛敎大学仏敎学会紀要』一八、二〇一三年三月）
- 同「『逆修説法』第二七日における八種義の成立」（『佛敎大学仏敎学部論集』九八、二〇一四年三月）
- 岸一英「『逆修説法』と『三部経釈』（『藤堂恭俊博士古稀記念 浄土宗典籍研究 研究篇』、同朋舎、一九八八年十一月）
- 同「『三部経釈』の研究（一）」（『法然上人研究』一、一九九二年四月）
- 同「『無量寿経釈』古層の復元——『三部経釈』の研究（二）——」（『佐藤成順博士古稀記念論文集 東洋の歴史と文化』、山喜房仏書林、二〇〇四年四月）
- 同「『阿弥陀経釈』古層の復元——『三部経釈』の研究（五）——」（『高橋弘次先生古稀記念論集 浄土学仏敎学論叢』一、山喜房仏書林、二〇〇四年十一月）
- 同「『阿弥陀経釈』古層復元本」（『仏敎文化研究』五四、二〇一〇年三月）
- 齊藤隆信「浄土宗学としての戒とその意義」（『日本仏敎学会年報』七四、二〇〇九年七月）
- 曾根宣雄「法然浄土敎における念仏と倫理」（『日本仏敎学会年報』七四、二〇〇九年七月）
- 本庄良文「『選択集』における「廃立」の意味——服部英淳訳の顕彰——」（『浄土宗学研究』三一、二〇〇六年三月）
- 同「『選択集』第四・第十二章における「廃立」の語義」（『八百年遠忌記念 法然上人研究論文集』、二〇一二年一月）

〔付記〕

本稿は、平成25年7月12日の佛教大学総合研究所の法然仏教の多角的研究の班の研究会において、口頭発表した内容の一部を抜き出し、加筆・修正したものである。

（かどのはるき 嘱託研究員、佛教大学非常勤講師）